

笑齋文集

821.2

Sy 941 t

17



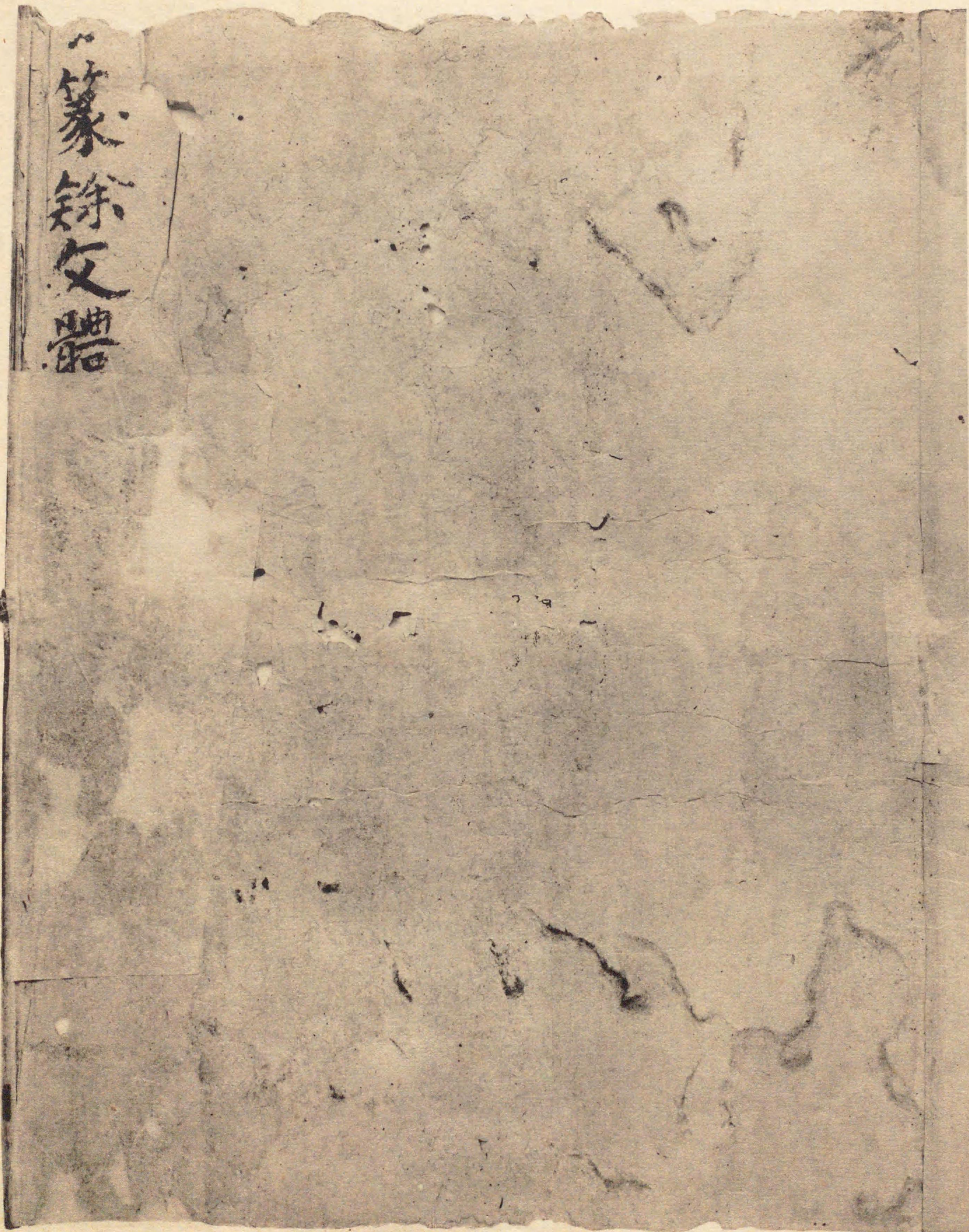
216528

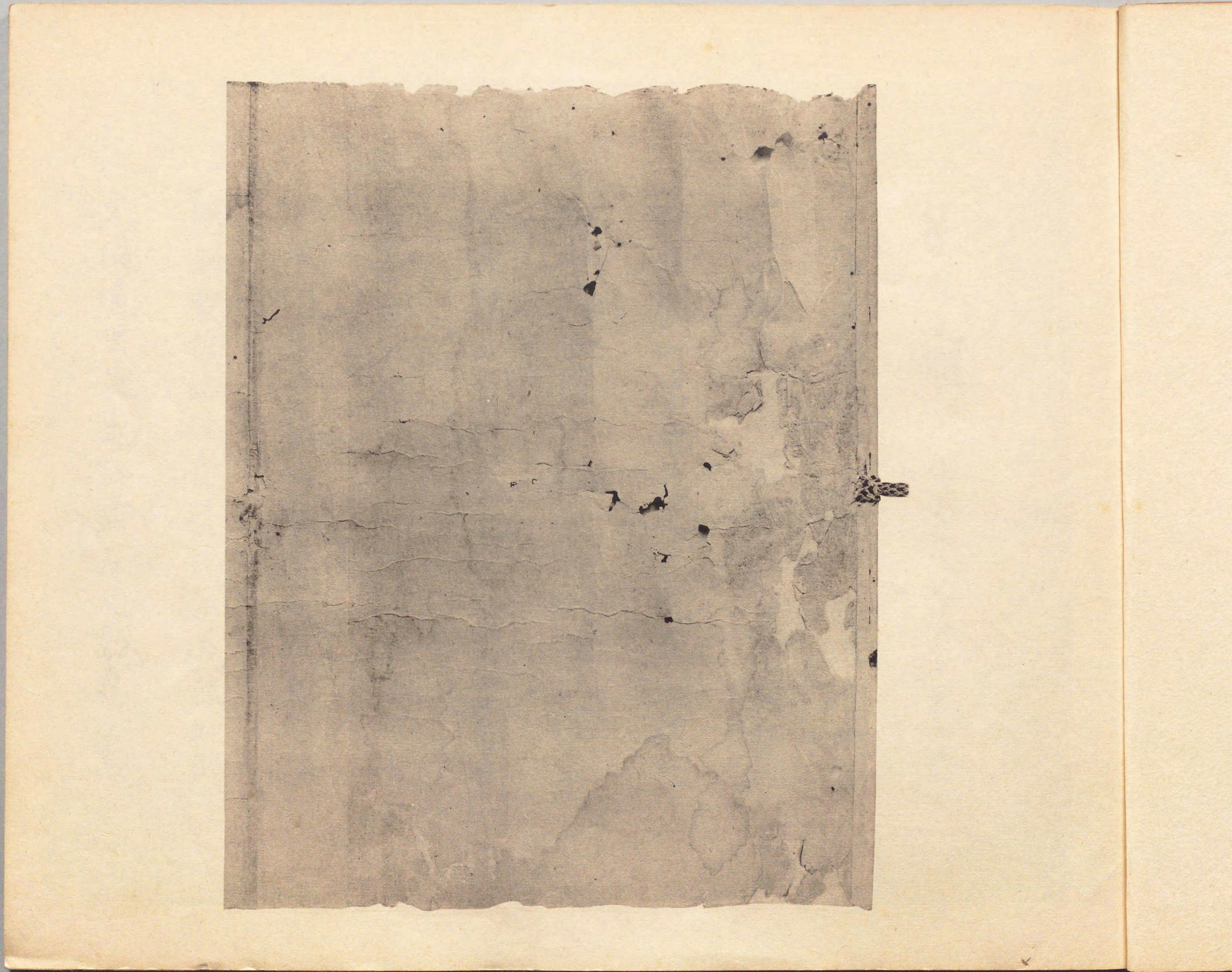
821.2 Sq 94/t





篆錄文冊





篆隸文體

侍中司徒竟陵王臣蕭子良序

夫事實_世稟有理_世寢_世群方迹用或幽幾
數常顯是以四象_世韜於帝先三畫炳
於出震河瑞龜龍之書既在沮誦之
始山呈金碧之記豈自創_世頡以還故
知書契由來_世邈矣永矣而儻首鳥冊
載_世肇古父將以啟折別源演_世搆紛緒
不然何其棄本而_世逐末哉若夫年世
懸謝聖哲_世淪往音_世徽若存儀容如則
又復道里長遠白雲在天動息必通

精雲不礙斯皆書之用也。爰自初載
以暨于茲仙籀金波體將數十。未學
浮淺人莫該尚。逆流驚景易以湮沉。
慮夫後生不廣文習。今搜校秘府採
索民間所得之書。六文外有二十有
三體。又博尋史傳。傍搜子集。其在為
書。悉無遺筭。而有名孽實鄙錄記文
逸如直特之爽尚。龍與之古詭。悉改
治之。補闕飾容。各載四字。若在名惑
異於述不殊。雖管所別錄。今悉混并。
若目時沿襲。如今之藁行者。雖異古

形則無別序。大凡五十二篇其實六
十有一名五十二法。備列于後。云爾。
六爻者。蓋叙為文之旨也。

一曰象形。日月是也。日為君道。故常
資圓滿之性。其中一書以陽數奇也。
月為臣道。用有虧損之形。其中二書
象陰數偶也。



二曰指事。上下是也。翻其形。書以成欽
義也。

上
下

三曰形聲。江河是也。工音如江，河音近河。又以水流之狀，故並曰形聲。

江 河

四曰會意。武信是也。夫兵事不可蹟點

故以戈ナニ乃為武。人言不可惑，故以信

定其名也。

武 信

五曰轉注。考老是也。耆老之字皆以

支居上，考老周之，故曰轉注。或曰了

左迴為考，右轉為老。

考 老

六曰假借。令長是也。令長無本字故
借令長音如亂。亂。舉之例。

風 鳳

龍書者帝大界氏獲景龍之瑞。因以
紀官文採其儀。鳥用頌。政令之龍書
此寫取則也。



龍



風



交



角

玉編云
篆在元
文編造
篆書
似符
符字切
分飲兩意
各持一合
為信

古文篆者黃帝史鄉人倉頡之所作
也。倉頡姓侯。對氏。首有四目。作則觀
焉。於天俯則取法。於地又寫鳥跡之
文。是以書者著也。辨去誓也。篆者傳

也所以昭著謔言傳之不朽者也

極幽明故鬼哭於夜窮筭毫釐

故鬼悲于野遠姬箱芋變秦斯册略餘

體既單又經焚燹漢武帝時魯恭王餘

數孔丘之室及宣帝世河内子殿李耳

之家在於地層各得古文蓋諸儒

之所藏也時人不詳誦之科斗有京

也杜林好而傳之至晉大康中汲郡

人發魏釐王家得叅書竹簡有師春

紀年錄語穆傳案其歲月則周幽王

時之所作也此又古文唯河内唯鞏璞解

而訓之

爨

講

習

習

聖

聖

文

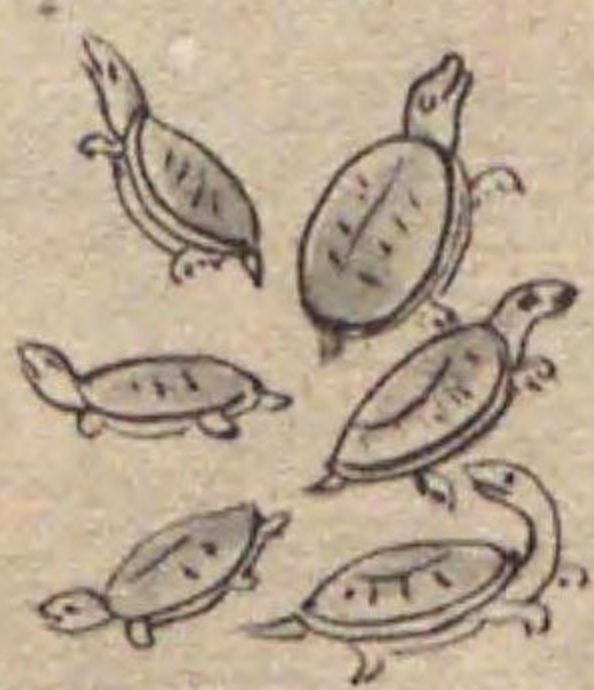
文

龜書者軒轅遊於玄扈之上靈龜負

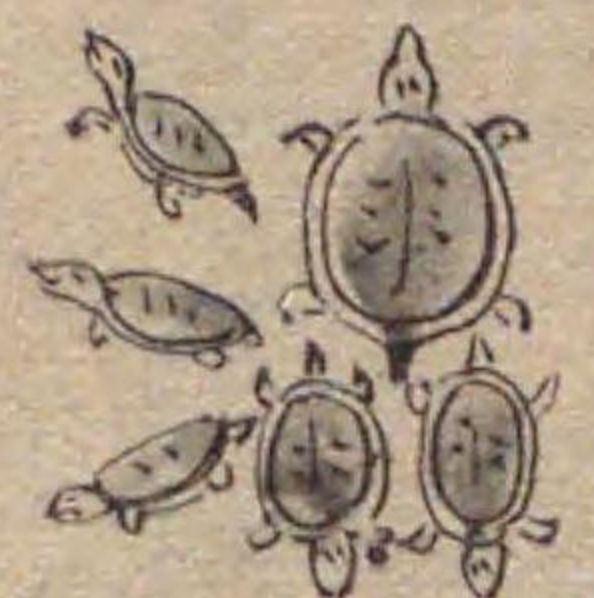
圖而蔡文章之繁亮自此始嘉其玄應

鳳收為書備悉禮而不去告朔思邵

而永植其棠



洛



納



出



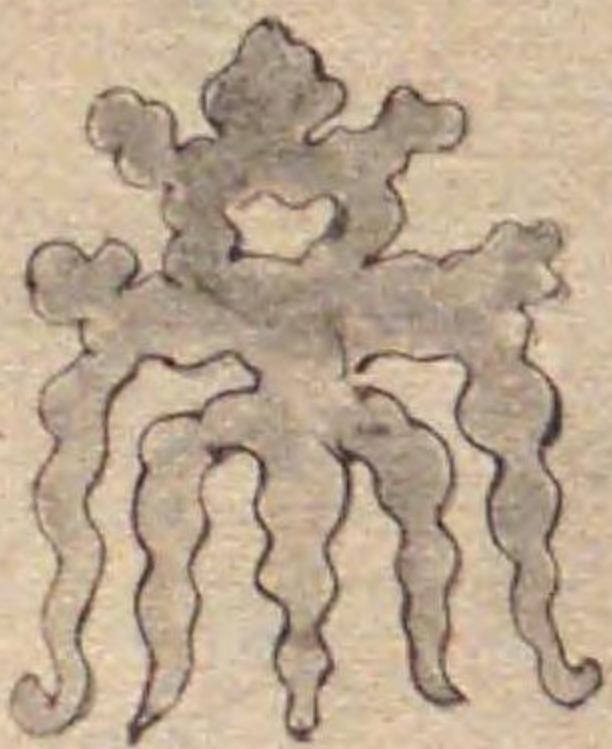
菑

雲書者又軒轅之時邠雲帝見其體

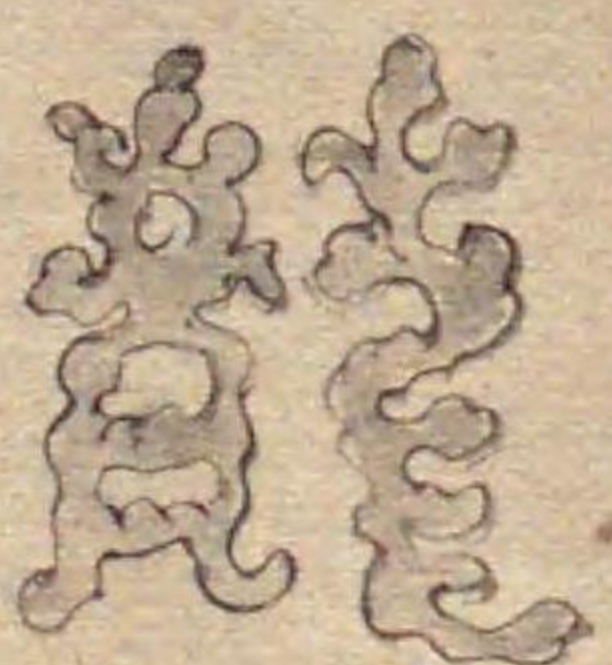
郁紛為書紅職也



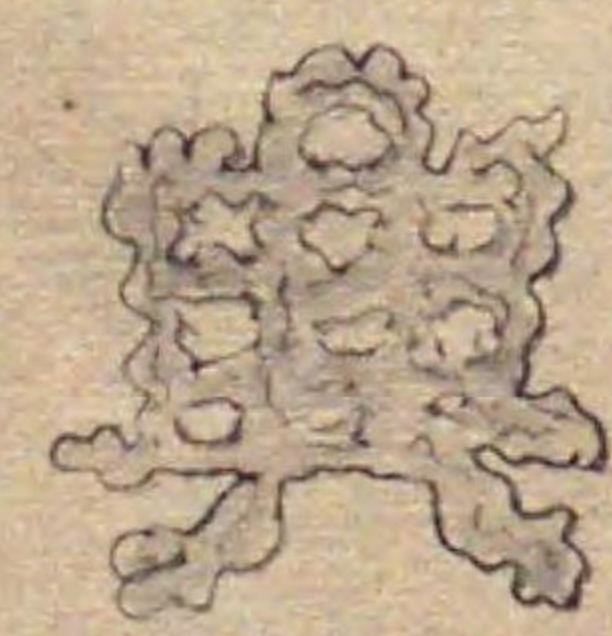
皇



帝



龍



興

鸞鳳書者白帝朱宣以身紅官文字

章般取以為象也



仙人書者帝高辛氏以人紀事車書

器般有仙人之形後代人因之遂列

八體



科斗書者其流於古文固有科斗

之名故飾之以形也

科斗 科斗 游 游

象形篆者帝夏后氏以鐘斷之書是

所以延來朕九牧貢金鑄鐘神好膏

和飪鍊倍以巧思之餘鑿指書此會

𩇛

鍾

𩇛

鼓

𩇛

洗

𩇛

用

非
四
卷

例匪家書者仙人勢先之所作也務

先辭湯之禪去徃清冷之陂殖匪而

食輕風時至見其精葉交偃則而為

書以馮紫經三卷後遂遊人有得之其室

𩇛

羅

𩇛

列

𩇛

衆

𩇛

物

庸書者起於周代文王籍行葦之教

驪崇山之仁近德遠昭此言南化有

虞不言名曰騶虞白質素章則樓園

史臣口供軌



虎



長



山

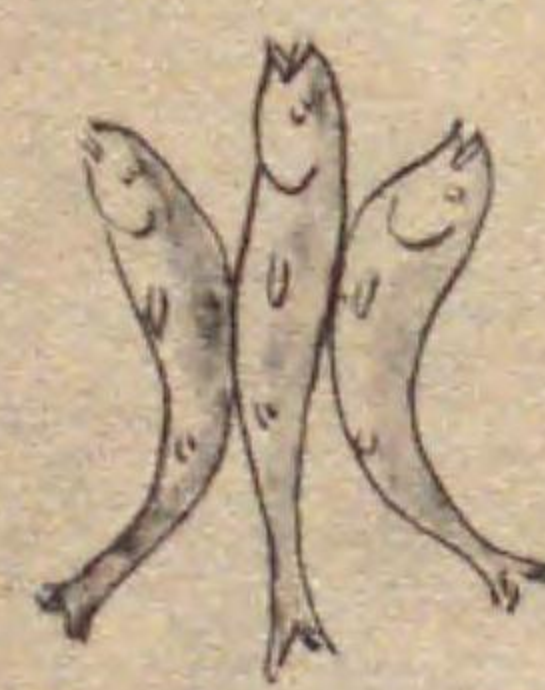
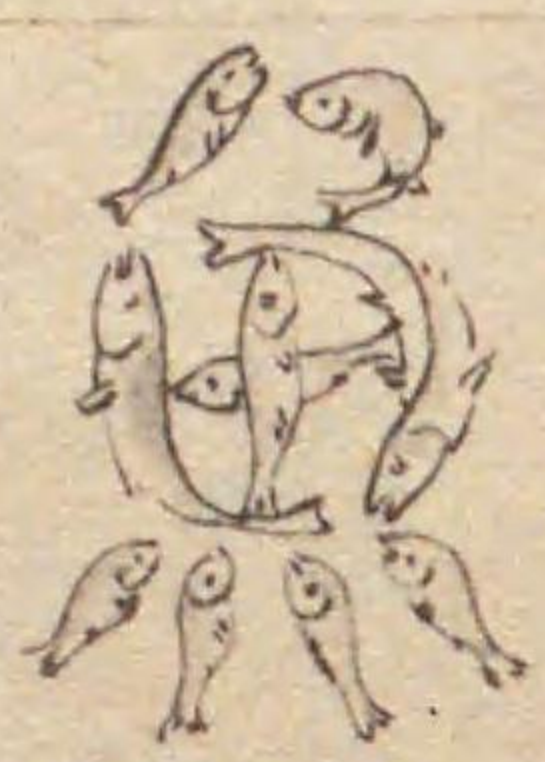


丘

鳥書者亦史供之所撰也。粵在交代
赤雀集戶降及武朝丹為流室金之
此函寔寫二祥也。



鳥書者亦姬函也。姬發順天明命取
亂侮亡。舍雉戒舟素鱗。魚躍九厥符
瑞供實紀之。文字體與之首骨為元
尾翼為丙。蓋是則寫



填書者周之媒氏仲春之月刺會男
女則以之書。薇采之文。及魏明帝使

京地事仲將點定以題芳林苑中楮

觀王虞王德皆字間滿塞故謂之填

書

禎

填

𠄎

擬

𠄎

烟

𠄎

既

箱書者周宣王柱下史之箱始增張

古文為大篆十有五篇世人因箱之

名而名書也新片既盡謂之奇字漢

史班固謂之史書云司隸校尉王尊

十歲而工史書序謂此也

𠄎

箱

𠄎

文

𠄎

中

𠄎

達

𠄎篆書者史箱之所作也而重複之

至
箱
收
讀
也
又
箱
同
太
大
篆

其法類於夏篆漢武帝以題達亭

鳳閣也

大

篆

重

皆

受書者伯氏之職也古文既訖武

亦書及也

受玉篇
時珠切
長天
二天

受

書

統

弱

周時銘斷篆者小篆之象形也漢

武帝世於汾陰得寶鼎案時巡張代

也吾丘壽王所誦漢新今之所載即

其餘文也

保

壽

傳

福

騏驎之書源自闕里管仲后稷精玄
 羽有德無時西將于野過仙人赤誦
 懷書三卷跋馮其曰孔丘雖聖子
 不騰騏驎於是環被掩泗備吾道窮
 既而及魯定業當備家歌弟子車
 其素王亦紀而為書也



政



洽



驎



祥

轉宿星篆書者宗大夫子壽之所作
 也榮感退舍素公移文國秦民安茲
 書長作之



蟲書者實藝書也。春秋胡妻之所作。
秋胡隨條遠仕，冉冉三年鳴埜，有壤
春居多思，桑時閑玩，集此為書。



蟲



藝



秋

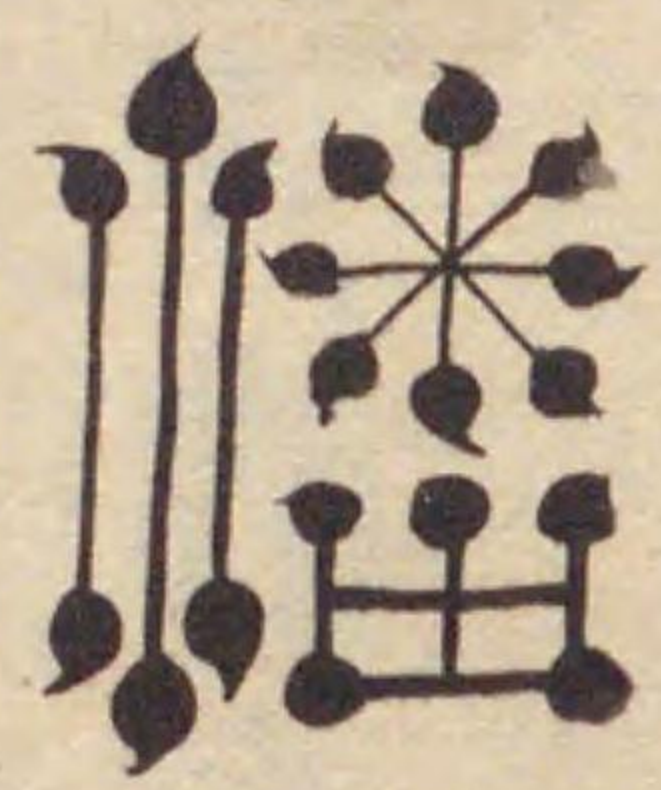


胡



妻

傳信鳥書者，六國時所書，其傳信者
也。其書有象鳥頭，故曰鳥書也。



信



傳



鳥



頭



故

小篆書者，秦丞相李斯刑古文，復篆

及史籀之書也。始皇登之果林，替頌

爰表名山，爰鑄金狀，皆斯之書也。



爰



表



名



山



爰



鑄



金

狀

皆

斯

之

書

也

刻符書者即古所謂繅篆在文或曰
 摹書所以刻印璽者也嬴氏政藉六
 世之資因百二之陰宥隸諸侯吞會
 列國秦車一軌趙璧毋來乃命王工
 琢而為璽於時丞相李斯大史令胡
 毋敬中車府令趙高竝用三篆各詳
 厥體作八字曰昊天有命皇帝後秦
 昌後之刻符於是為法



皇



帝



壽



昌

氣復直時之書者漢文帝園令蜀
 郡司馬長卿之所造長卿妙難六

律測尋二气，採日辰之禽，臨辨伏之
場職為此書。



子



丑



寅



卯



辰



巳



午



未



申



酉



戌



亥

署書

署書者漢高祖六年相國沛人蕭何

之所定也時天步初基人謀後謂方

恐捕勳忘師末凱何素均贊業留字

開中疏龍首之山作未央宮殿披秦

圖書卷其篆法述為此體以署舍龍

白虎二闕云

雲

雲

龍

龍

福

神

盧

盧

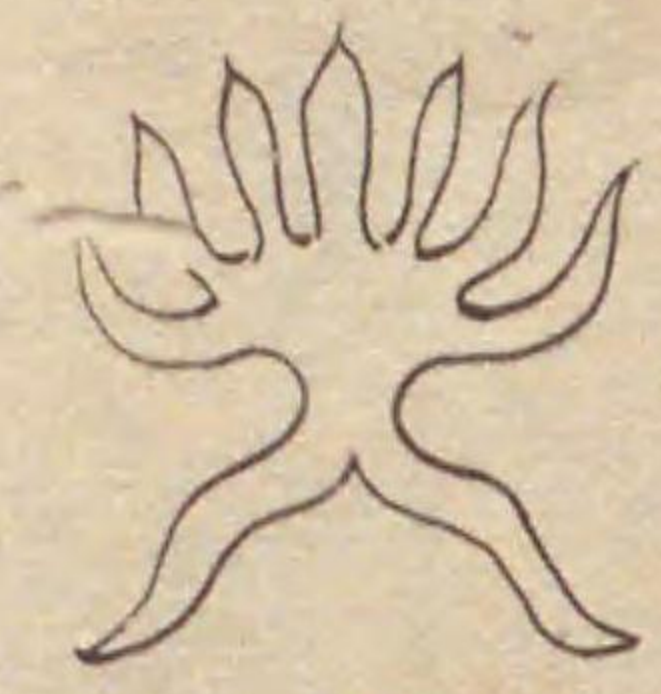
芝英書者自六國各異體之書。潛於

符信。則芝英興焉。及秦焚書。與其文

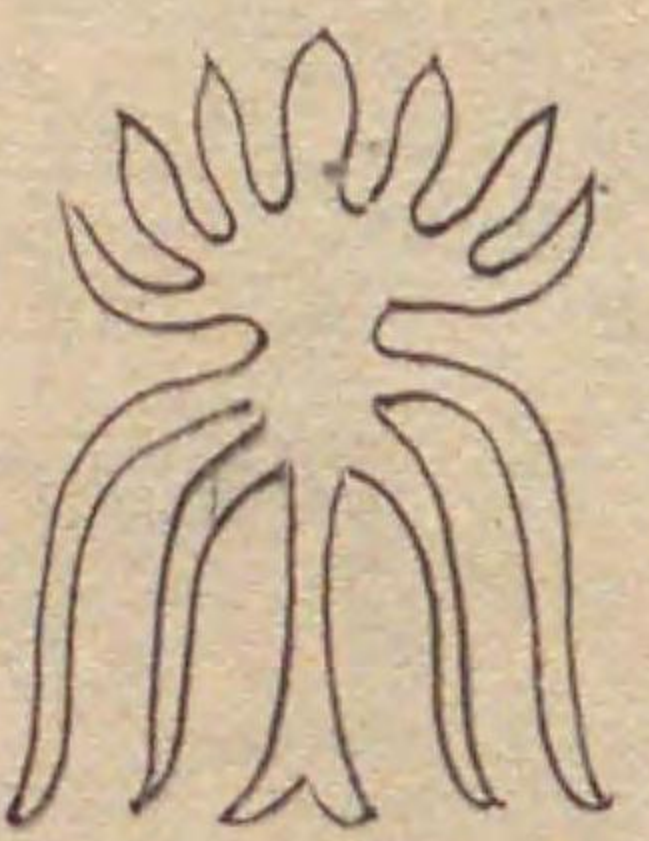
煨滅。在漢中葉。武帝臨翰。復有靈芝

一本植於前殿。既歎芝房之興。又述

芝英之毒云。



芝



英



秀



生

金錯書者古之錢銘也。周之泉府。厥

狀不存。降茲以遠。其文可觀。若漢之

銖兩。新之刀布。今具存焉。

銖

銖

刀

刀

布

布

今

今

尚方大篆者，漢時尚方工人題署之書，其體大於古，隸當程邈之述書使圖者，時方後人又鑄治之，斯法出焉。

雨 天 靈 靈 聖 聖 明 明

鵠頭書與偃波書俱石版所用也。在

漢則謂之天，一簡勝聯鵠頭故有其

偃

弱 招 弓 召 以 有 道 道

偃波書昂昂板書鵠下，臧亂者也。狀若

連文故謂之偃波

𠄎

輕

𠄎

散

𠄎

翻

𠄎

浮

尚露篆者漢章帝郎中杖風雷書之

所作以書章奏者也請其點綴必輕

疏之密條也

𠄎

晉

𠄎

衛

𠄎

曹

𠄎

秦

懸針篆者亦清書所作以點五經

篇目纖抽其勢有若針鋒者

𠄎

懸

𠄎

針

𠄎

精

𠄎

微

鬼書者宋元嘉十九年京口有人震

死而解見未書云

業

業

𠄎

錄

𠄎

所

𠄎

殺

飛白書者漢靈帝之所作也。有國人

張放禮隱居好學

霍鸞者翊奮奮飛飛

外國書者何馬寇寇王之所授阿

毘般者也船

𠄎義𠄎理𠄎光𠄎明

行書者正之小偽者也。魏大傳類川

鍾繇之時所閑習謂之行押書

傲敬變度體體勢勢

天竺書者梵王之所作所謂十四音

者也

迺

遠

𪛗

瑞

𪛘

聖

𪛙

德

席凡書者故司空瑯琊王僧虔儀

故

龍凡而作此書也以為龍凡形用榮

婉其且又流弱之患焉今故加之以

稜角而為虬之勢

𪛚

鳥

鳳

鳳

𪛛

飛

𪛜

翔

地書者魯人唐練當漢魏之文夢地

統已悟而狀之為書云

𪛝

地

𪛞

魁

𪛟

屈

𪛠

曲

一筆書者漢有道家弘農張芝學而

得之者也芝每裂素為衣先書後練

臨池握管泉必滿所以心敏手從體

談極暗成象猶環八趣

聯聯繞綿微微
密

散

虛韻云
新陶也
个通作
散又姓
文乳文王
四亥散聲
後子切
入聲子切

散餘書者衛子晉長水校尉恒所作

也衛氏三世工書及恒克蓋涵故知新

又為此法迹同飛白字依謹餘隸

斐斐尾尾還還蒙蒙

龍爪書者晉金紫光祿大夫琅琊王

羲之所作也嘗遊天台還至會稽稽

值風月清照夕止桐亭詠之末題柱

為一飛字有爪之形寫後人目之遂傳

五云
隸名可
以著之
隸隸並
同

龍凡也

龍
龍
龍
龍
龍

瑞華書者永明三年春二月瑞華之

書也于時青獻節白日賜北苑具

美東園軍藻飄鋼落英綴野而卷字

在舟林木接葉以成文又病禎祥慶

泰之辯紀千秋百世之祚黃門侍郎慮

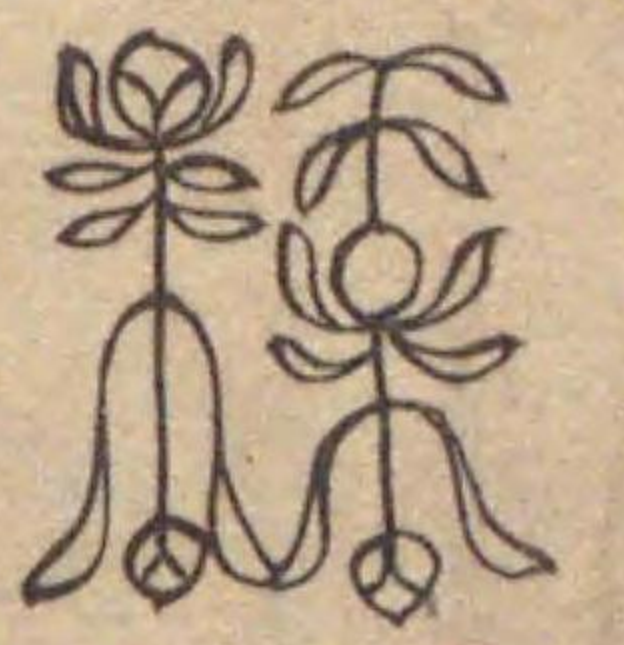
江河澈明詳圖聞而標口昔士運初

昇如虹在澤水曆方威非相右河

今皇上以木德應期而靈圃亦瑞木

流采前聖後聖以同符愛纂厥辭

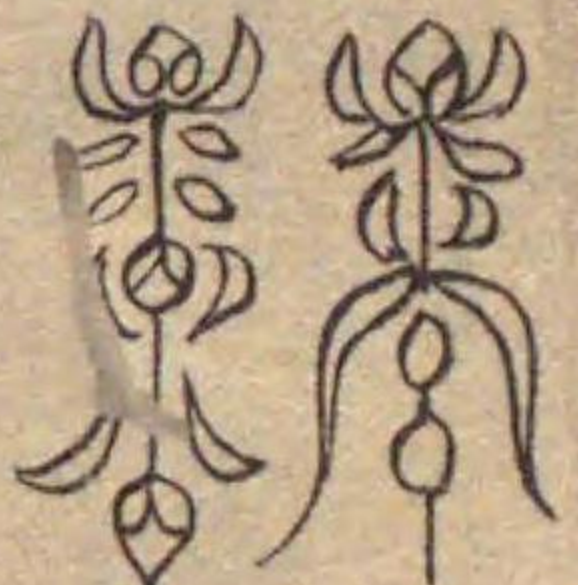
藏之王府焉。



祥



氣



精



華

篆隸文體

武本云古今篆隸文體之端同之

博聞錄第一卷

達安陳元觀編曰

寶璽文

篆

玉璽者傳國璽也天子之玉卞也其璽方闊

四寸龍鼻色黃其上篆文飾以蟲鳥與龍

形其平卞和所獻之璞琢而成璽楚求婚

於趙以璧納聘故稱趙璧秦昭王請以十五城

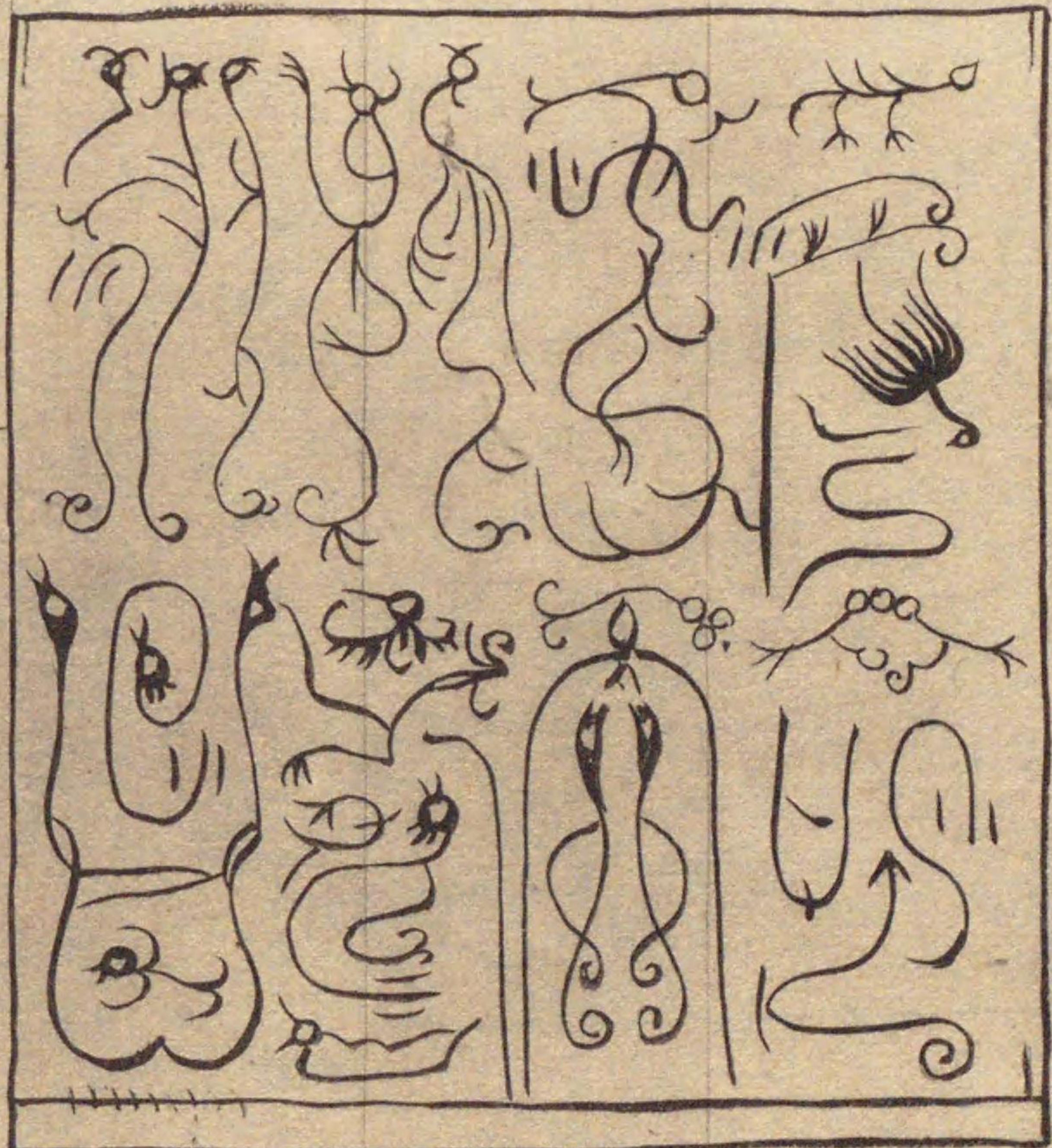
易之胡使蘭相如秦。璧如秦。二納璧而格城。
 相乃說秦。璧歸趙。至始皇併六國。獨有天
 下。命李斯篆書詔。工人孫壽琢之。唐肅宗乾
 元二年。扶風竇滔。率園於內府。黑月視之。
 光射周徹。滿室。實為希代之寶也。龍鼻一
 角。為足。鼓組以黃絲。詢於博識者。莫知其
 由也。治乃掉勒以示後來。

細螭



皇朝特奏狀。元陳應行云。此秦傳國寶
 也。其父曰。受命于天。既壽永昌。乃三

玉璽面文第一



三方均據
可清之

篆書藏碑本比之他刻者特有典刑意
且為唐內府掌璽寶詔所摹勒之本也

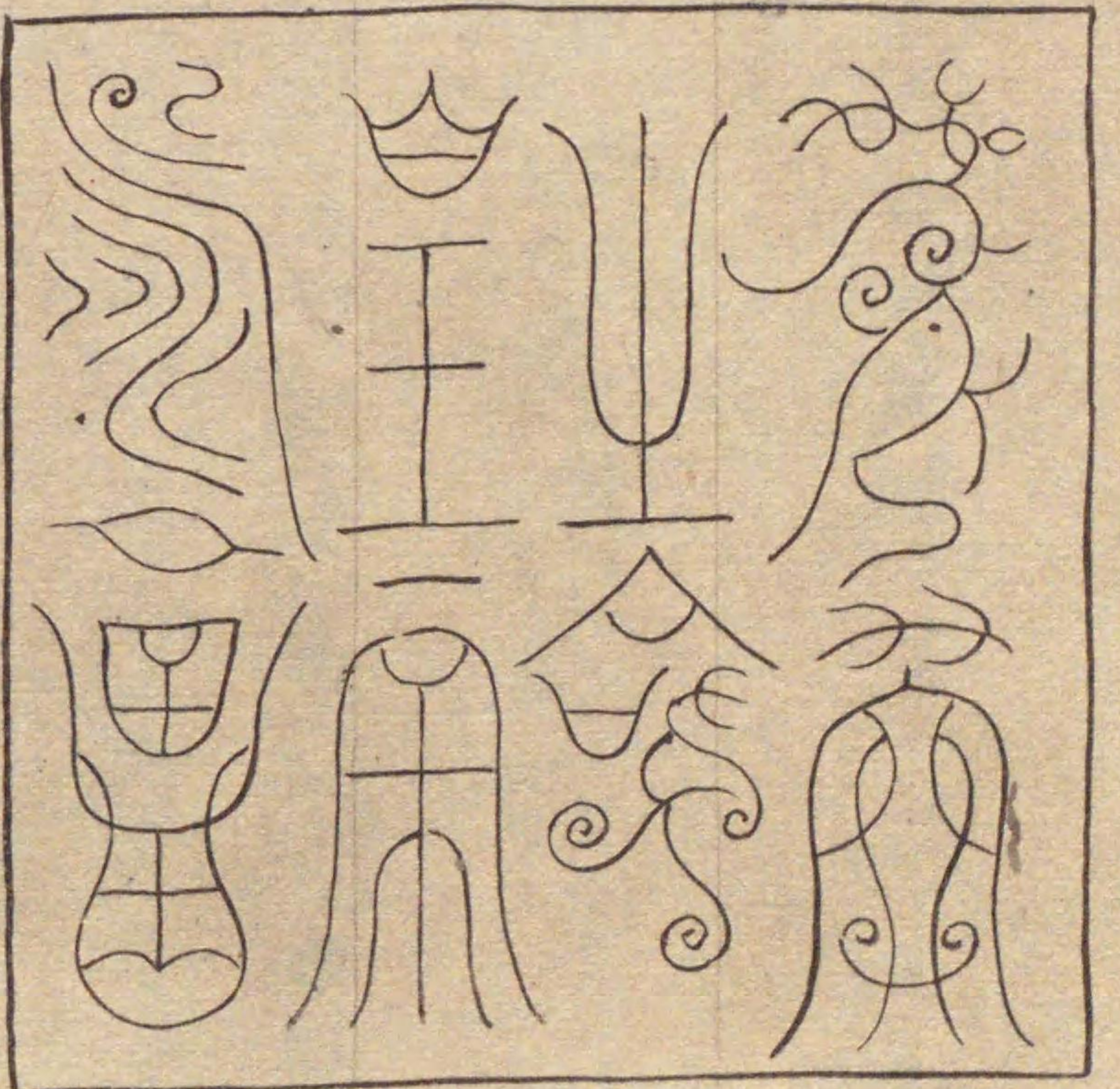
此璽文乃建谷劉氏篆藏向巨源所傳摹本也
雖篆畫體勢與夫形制巨狹似有不同然皆原

玉璽面文第二



述自秦始而存之列有蔡平仲所摹本及儒夢
瑛做篆之本又與此異然恐其無據故不復錄入
此刻乃秦璽背篆且其口受天之命皇帝
壽昌柱集古字格云璽之摹右在畢榮

玉 璽 背 文



章傳家筆法玄妙 淳古無過於此 雖託
飛鳳為不足以擬其勢 實摹亦之祖也

西漢高祖至平帝崩主莽居攝於元帝皇后

邊求取玉璽后璽之

筆於地璽鼻端一角為足折至今一角小致

同第八卷

西嶺陳誠甫編曰

器物原始

書黃帝內傳曰帝敘坐九因命蒼頡造文字

以變質為文帝王世紀曰蒼頡取像鳥跡始作

文字李瀚蒙求曰蒼頡黃帝下片觀鳥

跡以作文字鬼夜哭龍潛藏

係辭曰上古結繩而治後世聖人易之以書契繩長二丈二
尺軒轅皇帝治天下之時有蒼頡觀鳥跡制為文字於結繩至今
傳之淮南子曰昔蒼頡作書而天雨粟鬼夜哭許慎曰蒼頡視鳥
跡之文造書契則詐為萌生天知其將欲故為雨粟鬼為文書所
劫故夜哭也

廣韻奧曰

六書

一曰象形

象物之形作字
日月之字是也

二曰會意

比類為字也為
武人言為信是也

三曰形聲

取聲相成江河
之字是也

四曰指事

指事為字上下
之字是也

五曰假借

本無字依聲託
事今長之字是也

六曰轉注

左轉為考右
轉為老是也

八體

一曰大篆 二曰小篆 三曰刻符 四曰蟲書

五曰摹印 六曰署書 七曰殳書 八曰隸書

六書以篆與隸為最久又八體中刻符書與摹印書最別可尋之

玉篇云

書 式余切也謂篆類作書即黃帝史也象形指事形聲

轉注會意假借此造字之本也書者著也依類象形

謂之文形聲相益謂之字所以

說文以此方之

相於方事 紀往來也書之始也

漆書者漢書云溢孟帝有詔使人於高山石壁以漆書恐其字滅地數石壁作字于石文注云漢孟帝石壁之漆書見在高山

李士向彼正五經字 廉注甫

古文考經序曰

科斗書事

尚書序曰 西京雜記曰 秦程邈字元岑始皇用為

獄吏得罪雲陽獄中幽囚十年跡獄中改篆為隸指字是於是

始皇善之免其罪焉 史記周宣王時史籀為史官改古文以為大篆始著

十五篇 後溢古云張芝字伯英善草出 又曰杜烱溢丞相善草書

一本云杜恭

或書云草出始皇溢代不知誰人作之

西京雜記曰滕王帝駕至東都門馬悲鳴墜地不前公使揮

之三尺果得石擲有銘視之皆古昔科斗書也以今文寫之

毘沙門堂藏 篆隸文體 解説

本書は京都市山科毘沙門堂の藏にして昭和六年十二月國寶に指定せられたるものなり。

この書は卷子一軸にして、紙幅は縦一尺四分あり。(複製は縮寫せり。)表紙は幅八寸弱、内臺の斐紙を用ひ、見返は楮紙を貼したり。外題の下、發裝の邊、縦五寸一分許、幅二寸三分に別に紙を貼り、又見返しの末幅一寸二分許にも別に紙を貼ったり。これらはいづれも修覆の爲に加へしものならむ。本文は厚手の斐紙にして、紙數二十四枚、全長、三丈六尺九寸七分あり。各の紙幅は多少の異同あり。次に類聚して示す。

第一紙 一尺六寸一分(十四行)

第二乃至第六紙、第十一紙、第十五紙、第十七乃至第二十三紙 各一尺六寸二分(各十四行)

第七乃至第十紙、第十四紙、第十六紙 各一尺六寸二分五厘(各十四行)

第十二紙 一尺五寸一分五厘(十三行)

第十三紙 三寸四分五厘(三行)

第二十四紙 一尺二寸一分(十一行)

(以上、各紙の長の合計と全長との間に差三分許存するは各紙の長さの數に重複する部分あるが爲なり。なほ第二十四紙は全紙一尺五六寸のものならむが、末は軸に二卷ほど巻きて貼り付けあり、その第十一行も少しくかくれたり。)

全紙幅を通じて天地及び行間に淡墨の界を施せり。天地の界は高さ七寸五分五厘乃至七寸六分にして、上より約一寸四分五厘の邊と、下より約一寸四分の邊とに施せり。行間は約一寸一分五厘を標準とせり。軸は直径三分弱の木軸にして漆塗にせり。

本文は第二行より書きはじめ、第二十紙の第二行にて終り、その第二行には尾題を記せり。かくて空白二行ありて、次に博聞錄第一卷及び第八卷の抄出を四十三行にわたりて記し、次に又空白一行ありて、「廣韻輿曰」と記しはじめて、六書八體の事を記すこと九行、次に「玉篇云」と記して八行の抄出あり。末二行空白にして軸に付けり。

本文は楷體、墨書一筆なるが、その六書八體の各字象を寫せる部分は油を引きて半透明にせり。而して墨にて校異、脫文の補入、頭注、旁注等を記し、又朱にて返點、送假名、傍訓等を加へたるが、それらも同筆と見えたり。その筆蹟その他より推して鎌倉時代を下らざるものと推定せらる。

外題に篆隸文體と記したり。これは本文と同筆にあらざるべし。内題も首尾共に篆隸文體と記せるが、尾題の下に、

或本云古今篆隸文體云々端同之

と注せり。さて又その首題の下に

侍中司徒竟陵王臣 蕭子良序

とありて、その序文によれば蕭子良の著なること知られたり。以上の事を以て綜合して考ふれば、この書は日本國見在書目錄の小學家の中に

古今篆隸文體一卷蕭子良撰

と記せるものなること著し。この書は本國たる支那にては、はやく佚したるものと見えて、近世の著録に載することなし。隋書經籍志に

古今篆隸雜字體一卷蕭子政撰

といへるあり。これは書名も著者の名も稍似たれば、或は同じ書にして、誤り傳へたるならむといふ説あり。されど、その當否を知らず。

著者蕭子良は字を雲英といひ、支那、南朝、齊の武皇帝の第二子なり。武帝の帝位に即くに及びて竟陵郡王に封ぜられ、侍中に任ぜらる。永明二年には護軍將軍に任ぜられ司徒を兼ね。永明五年には司徒を正官とせられ、侍中は故の如し。永明十年に尙書令に補せられ、しばらくして尙書令を解き、中書監に任ぜらる。武帝大漸の時、皇太孫昭業の輔導を托せられて、太傅となり、侍中の任を解かる。昭業立ちて隆昌と改元す。その年病を以て歿す。年三十五。文宣王と諡し、天子の禮に準じて葬る。任彦昇の作れる齊竟陵文宣王行狀一首ありて(文選)、備さにその爲人を贊す。子良はその宗室の貴

と文武の才幹とによりて一世に重んぜられ、ことに當時の有名なる文人と交深く、その聲譽の高きこと南朝王族の第一と稱せらる。かつて、學士を集め、五經百家を抄して四部要略千卷を爲るといふ。今佚せり。後に、明の張溥その詩文を集めて竟陵王集と名づく。而して、本書の序をそれに載録せざるは、その彼國にはやく佚せしが爲ならむ。本書はその本傳にもその名をあげずといへども、その官銜を以て見れば、永明年中の著たること疑ふべからずして、本書瑞華書の説明に永明三年の記事あれば、その後の著たるべく、今よりして約一千四百五十年以前の著たり。子良また書をよくせりと見え、唐の寶泉撰の述書賦の寶蒙の注には齊十五人のうちに子良の名を列ね、又張懷瓘の書估には古來の書家を五等に分ちて品評せる、その第四等二十人のうちに子良を列ねたり。

この書の日本國見在書目録に載することは既にいへり。これが本邦に入りしは何時頃なりしかその詳かなることを知らず。性靈集卷四に載する、弘仁五年の獻梵字并雜文表の目録の中に「古今篆隸文體一卷」とあり。之を以て見れば、空海の唐より將來して嵯峨天皇の御覽に入りしことありしは明かなり。かくて降りては實隆公記を見るに、明應八年五月九日の條に

及_レ晚帥卿入來數刻雜談有_レ興。(中略)篆隸文體一卷被_レ見_レ之、近來殊勝物也。今暫抑留可_レ見_レ之由報_レ之

とあり。この帥とは蓋し、この時の太宰權帥たりし前權中納言町廣光(柳原の支流)をさすならむ。かくて考ふれば、平安朝の初期より室町時代までは知られてありしこと明かなり。然るに江戸時代以降之を知るものなく、全く佚したるものと思はれたりしが、近時、毘沙門堂の寶庫より發見せられしものなり。

支那にてはその名の似たるものを隋志に見るのみにして、唐志には之を載せず、之が傳へられしことを記せるものなし。然れども、後唐の明帝の長興二年に林罕が記せる字源偏傍小説の序に「閱_レ古_レ今_レ篆_レ隸_レ始見_レ源由」とあるは恐らくは本書をさすものならむ。次には宋の太宗の勅によりて雍熙三年に、説文解字をば、徐鉉が校訂せし時にその序の注に蕭子良の説として載せたるもの略、この書にいふ所に同じければ、その頃なほこの書は存せしならむ。然るに、南宋、理宗の頃の人、陳思の書苑菁華は古今論書の語を編集せしものにして、下にも示す如く、本書いふ所に似たるもの名目をあぐるに少からねど、本書には言及することなきを以て見れば、當時既に亡びたりしならむか。上にもいへる明の張溥の編せる竟陵王集にはその著、淨住子の全文までを載せたるに、本書には毫末も觸ることなきなり。

本書の序文は二十二行にわたりて記せり。その説く所は文字の起源よりしてその開展して種々の姿を呈するに至るによりて、それらを博く搜りて、輯録せる由を述べたるものにして、そのうちにいへる言に

今搜_レ秘府_レ探_レ素民間_レ所得_レ之書、六文_レ外有_レ二十_レ有三_レ體。

といひ、

大凡_{五十二}篇、其實_{六十}有_一、名_{五十二}法、備列_{于後}云爾

といひて文をとぢめたり。

かくて先づ、六文をあぐ。六文は所謂六書による文字にして、これは例として二字づつをあげて説明せり。而してその篆の體は今本の説文の字體に類せずして古拙の俤を存せるを見る。

六文の後にはその所謂五十二法を録するものなるが、ここには序に明言せる如く、各四字づつを標出して説明せり。かくて、その五十二法なるもの實につきて檢するに載する所四十三體に止まる。書苑菁華に王愔の著たる古今文字志目といふものを載す。この古今文字志といふ書は唐の法書要録に既にその目のみを見て、その書を見ずといへる佚書なり。その上卷は古書三十六種の目にして、その目はこの書にあぐる所と大體一致して、多少の出入あるものなり。更に又唐の章續の五十六種書といふものありて、その目と説明とを見るに、また本書と大部分一致するものあり。而してこの三書を比較するに、時代を降るにつれて、その名目の増加あるを認む。次に便宜の爲に本書を中心として三者を比較して示さむ。

古今文字志

篆隸文體

五十六種書

龍書(17)

龍書

龍書(1)

古文篆(1)

古文篆

篆書(3)(説明通ず)

龜書 (19)	龜書	龜書 (8)
雲書 (22)	雲書	雲書 (4)
鳳書 (15)	鸞鳳書	鸞鳳書 (5)
仙人書 (21)	仙人書	仙人形書 (7)
科斗篆 (4)	科斗書	科斗書 (6)
象形篆 (3)	象形篆	鐘鼎書 (9) (說明通ず)
倒薤書 (28)	倒韭篆	薤葉篆 (10)
鳥書 (13)	鳥書	虎書 (11)
魚書 (16)	魚書	鳥書 (12)
填書 (35)	填書	魚書 (13)
大篆 (2)	籀書	填書 (14)
	複篆	大篆書 (15)
爰書 (11)	爰書	複篆 (16)
小篆 (5) (五十六種書と照合)	周時銘鼎篆	爰書 (17)
麒麟書 (18)	麒麟書	小篆 (18) (説明通ず)
蟲篆 (8)	轉宿星篆	麒麟書 (20)
	蟲書	轉宿篆 (21)
	傳信鳥書	蟲書 (22)
	小篆書	傳信鳥迹書 (23)
刻符篆 (6)	刻符書	小篆書 (25)
十二時書 (25)	氣候直時之書	刻符書 (26)
署書 (10)	署書	氣候時書 (31)
芝英書 (23)	芝英書	署書 (29)
金錯書 (24)	金錯書	芝英書 (32)
尙方大篆 (14)	尙方大篆	金錯書 (34)
	鶴頭書	尙方大篆 (35)
偃波書 (29)	偃波書	鶴頭書 (36)
垂露篆 (27)	垂露篆	偃波書 (37)
懸針篆 (26)	懸針篆	垂露篆 (39)
飛白書 (36)	鬼書	懸針篆 (40)
	飛白書	鬼書 (53)
	外國書	飛白書 (42)
行書 (32)	行書	外國書 (54)
	天竺書	行書 (46)
		天竺書 (55)

篆篆(7)

虎爪書

蛇書(20)

蛇書(45)

一筆書

一筆書(43)

散隸書

散隸書(47)

龍爪書

龍爪書(48)

瑞華書

繆書(12)

篆篆(7)

細篆書(24)

隸書(9)

繆書(12)

古隸書(27) 徒隸之書(28)

篆書(34)

篆書(34)

篆書(39)

蚊脚書(30)

蚊脚書(30)

蚊脚書(38)

草書(31)

草書(31)

草書(51)

楷書(33)

楷書(33)

八穗書(2)

仙人篆(19)

章草書(41)

八分書(44)

篆及行隸(49)

八體書(58)

花書(56)

以上を通覽するに篆隸文體にあぐる所の種類四十三目にして序文に五十二篇といへるに比すれば、九目少し。而して古今文字志に載せてこの書に載せざるもの七篇ありて之を加へてもなほ二篇の不足あり。かくてその序文を見るに、

如_ニ今_ノ之_ノ篆_ノ行_ニ者_ニ雖_レ異_ニ古_ノ形_ニ則_レ無_ニ別_ノ序_ニ

とある、その篆行といふは五十六種書にいふ所の四十九、篆、及、行、隸、といへるものなるべくしてこれははじめより載せざりしものならむ。さらば、他の一目は或は四十一、章草書などにもあらむか。上にもいへる如く説文解字の徐鉉の序に徐錯の注せる文には蕭子良の文を引くこと三所にして篆印、署書、艸書の各條に見ゆ。その篆印の條の注は

蕭子良以_ニ刻符篆印_ニ合_ニ爲_ニ一_ノ體_ニ。徐錯以_ニ爲_ニ符者竹而中剖之字形半分、理應_ニ爲_ニ一_ノ體_ニ。篆印屈曲填實則秦隸文也。子良誤合_レ之とあり。今本書の刻符書の説明を見るに、

刻符書者即古所謂繆篆在文或曰篆書所以刻印璽者也。

といへるものにして徐錯のいふ所に一致するが如し。但しここに徐錯は子良の言を誤解せるが如し。次に署書の條の注は本書の署書の注文を極めて略して取れること著し。次に艸書の條の注を見れば、

蕭子良云、篆書者董仲舒欲_レ言_ニ災異_ニ、篆_ノ艸_ノ未_レ上_ニ、即_ニ爲_ニ篆書_ニ、篆者艸之初也

とあるなり。然るに本書には篆書の條も、艸書の條もなきなり。これ余が本書に脱漏あるべしと思惟することを實證するものといふべし。

本書には上の如き大なる脱漏の外に文字の誤寫も少からざるが如し。今この本は唯一の傳本にして、中外に之を比較すべき本なしといへども五十六種書の説明に照して多少それらを訂すことを得べきが如し。たとへば、龍書の條の「大吳氏」龜書の條の「軒轅」鸞鳳書の「文章衣服」などの正字は

五十六種書に明かなるが如き、これなり。

更に又顧みるに、古今文字志の目になくしてこの書にあるものは、十四目にして、その最後の瑞華書以外の十三目は五十六種書にも載する所なれば唐までも傳はりしならむ。その瑞華書といふものは永明三年二月に蕭子良がまのあたりに見たりしものをあげたるものなるが、その時限りにて後には傳はらざりしものならむ。かくて、かくの如き異風の字體も、消長變遷の古來少からざりしことをこれによりて推測しうべきが、當時、子良の幕下として有名なりし王融にも亦古今雜體六十四書を著したりといひ、又章仲といふものは定めて九十種となすといひ、又謝善勛といふものはそれを増して百體とせりといふ。かくてそれらの事が、古來より行はれしことを告ぐといふべし。

さて以上、五十二種といひながら同時にそれらを總稱して本書には八體といへり。これは説文の序にいふ所の秦の八體を基として、後にさまざま異風の字體の起りしかど、なほ總稱してもとの如く八體といへりしことを告ぐるものにして、興味深きものなるが、かくて從來書家の往々行ひ來りし百孝、百壽、百福等の異風の字體を以てさまざまに書くことのその由來頗る遠きものたることを思はしむるに足るものあり。加之、本書にいふ所の受書、金錯書、尙方大篆などは、支那古代の兵器其他の刻銘、象嵌等の字體、又鑑鏡などの裏に鑄出せる字體の基づく所を語る等の點少からずして、ただ文獻學の上のみならず、考古學の研究資料としても缺くべからざるものなりとす。かくて又その填書の如きは今もなほ染物の字體として用ゐらるる體にして、一般に文字を圖案化せむことを企つるものにとりては唯一の學術的の典據といふべきものなり。かくて、本書は學者工藝家の坐右に必須の書なりといふべし。

本書の末に附録する所は、本文に關する點あるものを参考の爲に抄録せるものならむが、その博聞録の編者陳元靚は宋末元初の人なるが故に、本書の書寫も、鎌倉時代の中期以上に溯るものにあらざるは明かなり。

昭和十年五月一日

山 田 孝 雄

昭和十年五月廿五日印刷
昭和十年五月廿八日發行 (非賣品)

發行兼印刷者 古典保存會

右代表者

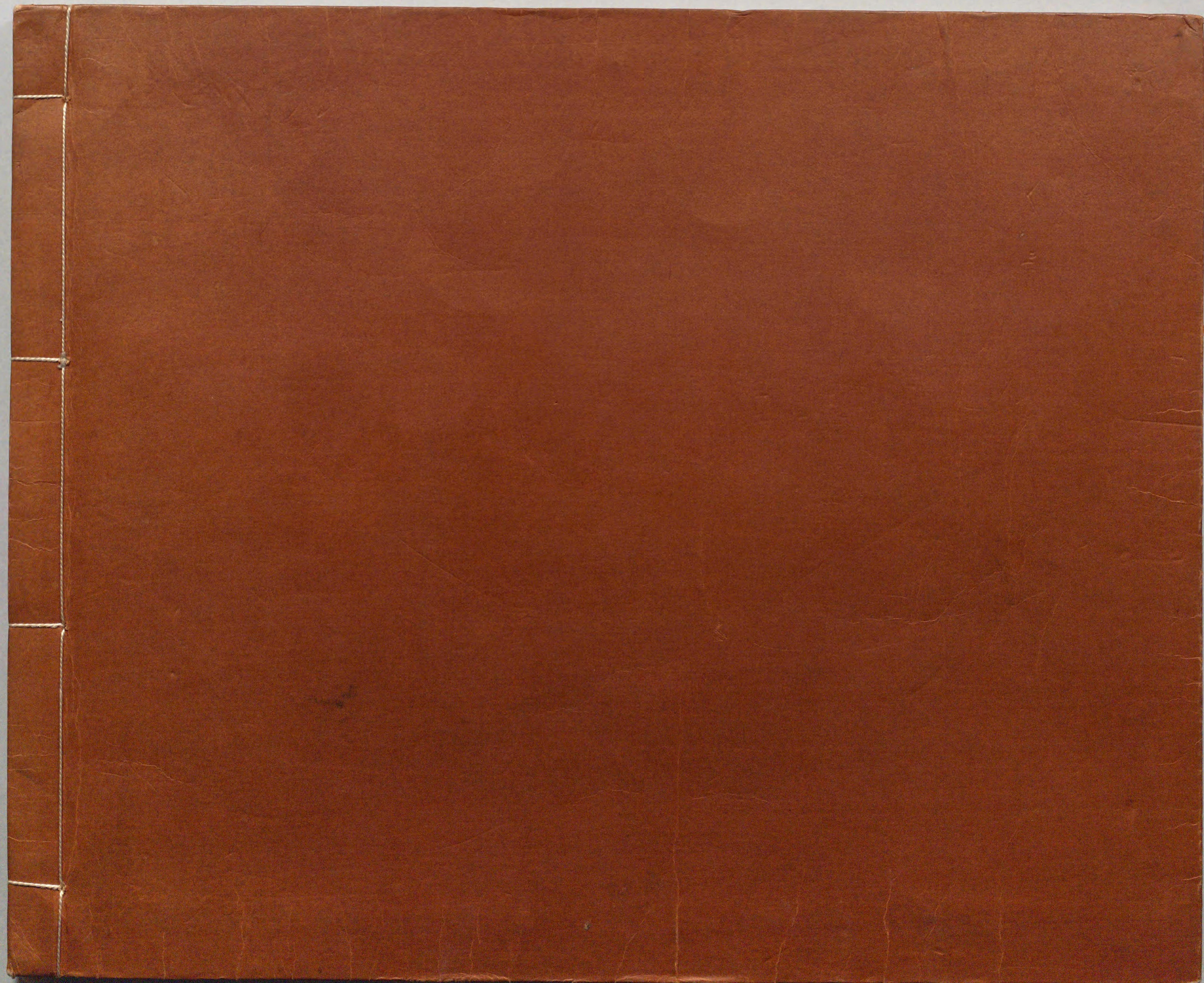
東京市下谷區上野恩賜公園地
七條 愷

印刷所 金屬版印刷所

東京市神田區花房町五番地

古典保存會事務所

電話下谷六七八八番
振替口座東京四四九四八番



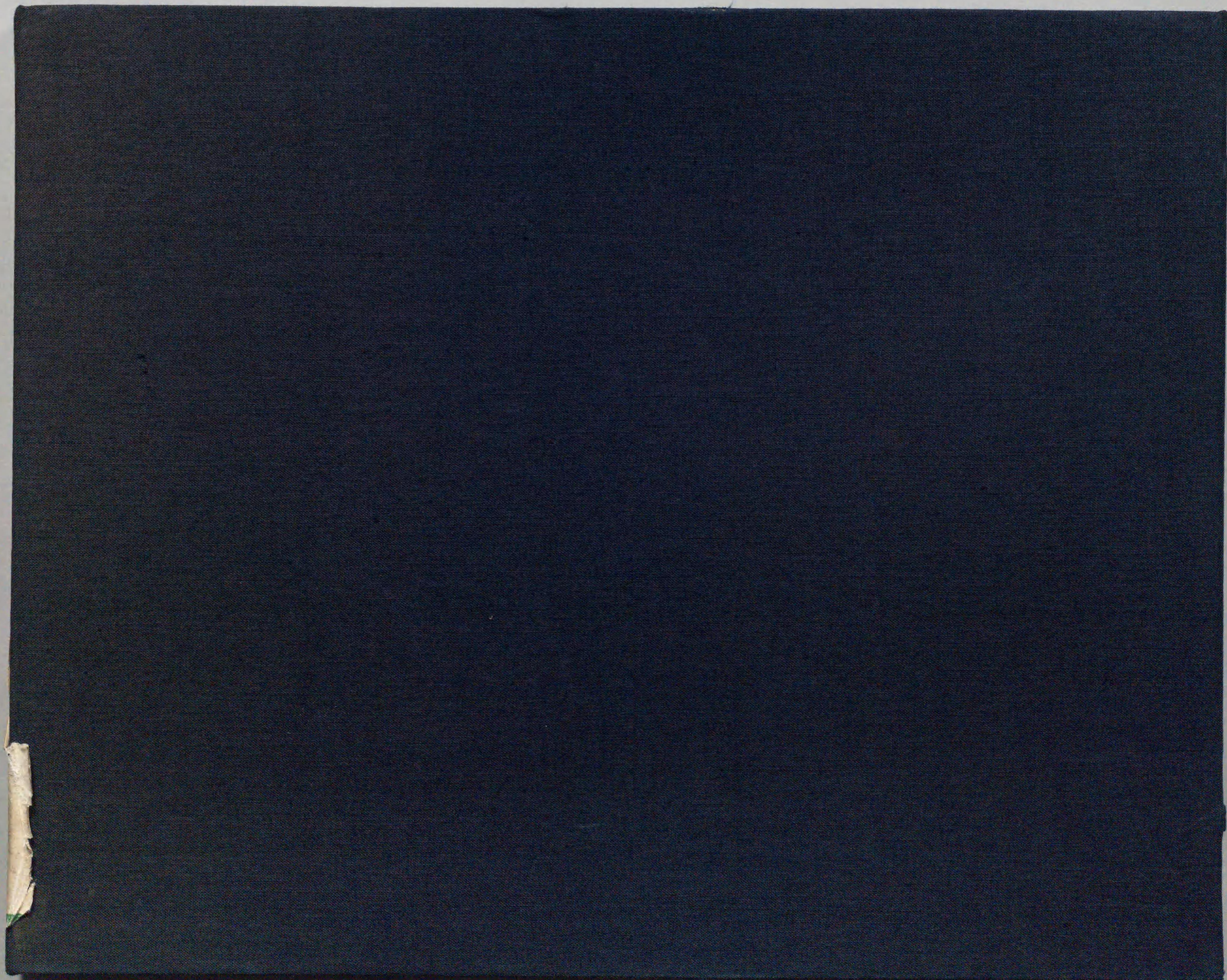
篆隸文體

821.2

821.2
Sy941t



00216528

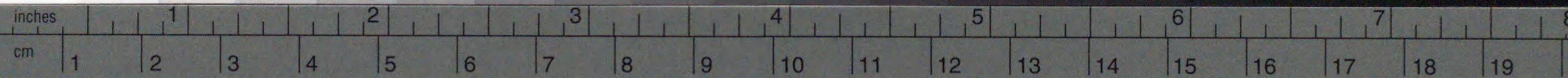


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

